

別添 2：学会発表抄録

セラピーロボット・パロと作業課題の併用により、BPSD が軽減した一症例

○水口裕香子（作業療法士）、西埜和希、塩屋博史、柴田早紀、辻野精一

【はじめに】近年、BPSD に対する非薬物療法の重要性が論じられているが、具体的効果を示した報告は少ない。今回、認知症症状に加え、重度の高次脳機能障害を呈した症例に対し、アラシ型ロボット『パロ』と作業課題を併用した。結果、BPSD の軽減、認知機能改善を認めため、報告する。【症例】85 歳、女性。心原性脳塞栓症にて当院救急搬送。アルツハイマー型認知症であったが、入院前は介護保険使用し独居。【評価】17 病日、回復期へ転棟。麻痺は認めず。重度の流暢性失語、注意、短期記憶の低下。課題持続は 2 分で、直前の行動も忘却。トイレの場所は記憶困難。NPI：45/120 点。不安・無関心で高値であり、徘徊頻回。【経過】50 病日、BPSD 改善目的に訓練時にパロを導入。当初は興味を示さず、課題意欲も低かったため、適宜、パロへの注視を促し、場面転換を図った。徐々に、パロと過ごせる時間が増え、簡易な注意課題も実施可能となった。83 病日、簡易な反復要素のある課題を導入し、病棟課題へ移行。1 人でも、1 時間以上の作業課題が行えるようになった。【結果】トイレの場所を認識。NPI：16/120 点。不安・無関心で改善し、日中の徘徊は消失。【考察】本症例は、脳梗塞発症により、BPSD の増悪を認め、訓練に難渋した。重篤な認知機能低下を示す症例に対し、パロを用い、安心感を確保した上で、作業課題を提示する方法は、注意・記憶の向上に寄与し、徘徊の減少につながる可能性が示唆された。

2018 年リハケア合同研究大会、鳥取